自閉症の社会性障害の研究の発展を期待して

黒田　吉孝

くろだ　よしたか
滋賀大学
本誌編集委員

自閉症の基本的障害として生来性の社会性障害と言われることが多い．本特集では，自閉症の社会性障害を取りあげることにしたが，本テーマが自閉症の本態にかかわっていることから，このテーマの深淵さと広大さについて，まず始めに，認識する必要があろう．重大であるがとてつもなく難しいテーマなのである．

そもそも社会性という言葉自体が曖昧さをもっており，生来性の社会性障害と言われても，一人ひとりの受け取り方が異なってくる．また，自閉症が発達障害であることから，社会性障害の内容は，成長や発達にしたがって変容し，複雑さも異なってくる．それ故，社会性の障害については，他の発達障害との異同はもちろんのこと，自閉症の障害（本態）論の中で社会性障害をどのように位置づけるか，社会性障害の定義を明確にしながら議論を始めなければならない．さらに，最近の障害理解は，環境との相互関係で論じられることが多いことから，生活や経験等の広義の意味での学習を踏まえて展開される必要があろう．そして，そこでは，母集団の代表としての平均的な特性と個人差に代表される個別の特性とが理解され，相互に関連づけられる必要があろう．

本特集でも，自閉症の社会性障害を自閉症の本態に関する議論と関連づけ，自閉症の障害論の枠組みでこの障害を理解しようとした．この場合，今日のスペクトラム障害としての自閉症理解における優越性と課題とを整理し論じた．例えば，スペクトラム障害における発達と障害の質的な検討が，連続性の強調以外に，必要であることを論じた．

ところで，自閉症が社会的障害であるという場合，全般的な社会性障害ではないこと，自閉症特有の障害も教育支援等で改善・発達することは，障害理解として，当然のことながら，押さえておく必要があろう．その一方で，自閉症の社会性障害の理解について，今日も，さまざまな議論がおこなわれていることにも注意を向ける必要があろう．カナーの論に代表される「情緒的接触の交流」の障害に基づく障害論と，「心の理論」の障害にみられる認知的な「メタ表象」の障害論等，いくつかの論がみられ議論が続いているのである．これらの議論は，自閉症の早期兆候にも連動し，早期発見・療育等にも関連してくる．情報処理様式の障害という認知科学の動向にも関心を向ける必要があろう．

社会性障害は，成長に従い，学校等での集団生活の困難となってくる．状況判断の適切性や協働活動における役割分担等が求められる，複雑な仕組みの中での生活が余儀なくされる．周囲の理解が二次的障害を予防することになるが，事はそう容易ではない．幼児期からの一貫した支援が求められるが，人格としての総合的な能力をいかに獲得することが可能か，どのような支援がふさわしいのかが，今日，問われている．

なお，本特集では，自閉症を自閉症スペクトラム障害と同義として使用した．